『東京大学言語学論集』**41** (2019.9) 131-153

日本語は使役移動事象をどう表現するのか[1]

―使役手段の違いに応じた表現パターンの変異―

古賀裕章

キーワード: 使役移動事象　経路主要部表示型　経路主要部外表示型　主体移動表現　客体移動表現

要旨

本稿の目的は古賀 (to appear) に引き続き、日本語における使役移動事象の言語化を考察することにある。古賀 (to appear) では、使役移動事象のうち KICK を使役手段とする事象の言語化のみに焦点を絞り、特定の意味要素の表現頻度や表現パターンが自律移動事象のそれとは大きく異なることを指摘して、その理由を明らかにした。本稿では、KICK 以外に PUT、CARRY、CALL を加えて、より包括的に使役移動事象の言語化を分析する。分析を通して、日本語における使役移動事象の言語化が使役手段の種類に応じて大きく異なることを示し、そのような差異をもたらす言語個別的および普遍的要因を浮き彫りにする。

1. はじめに

Talmy (1985, 1991, 2000) によって提案された語彙化の類型 (lexicalization patterns) や事象統合の類型 (the typology of event integration) は様々な言語で検証され、その妥当性が広く認められる一方で、様々な問題点も指摘され代替案も提示されている (Croft et al. 2008; Matsumoto 2003; Slobin 2004; Wälchili 2001; 松本 2017a, b)。Talmy の研究が表現可能性に主眼を置いているのに対し、Slobin による一連の研究 (1996, 1997, 2004) は、とりわけ様態の表現頻度に着目し、Talmy が提案した類型が実際の言語使用および言語を使用する際の思考 (thinking for speaking) に一定の影響を及ぼすことを示した。また、古賀 (2016) はビデオクリップを使用した実験的データに基づき、日本語と英語における自律移動事象の言語化の特徴を他言語との比較を通して浮き彫りにした。それによれば、様態や直示といった移動の意味要素の表現頻度は、必ずしも語彙化や事象統合の類型によって予測することはできず、動詞接頭辞や動詞語幹といった形態統語スロットをめぐる意味要素間の競合の有無や、当該の意味要素を表現するための形態統語手段の数といった複数の言語個別的要因を考慮する必要があるという。さらに松本ら (2018) は、やはり実験的データに基づいて、15 種類の経路を含む自律移動事象の言語化を考察し、動詞で表現されやすい経路とされにくい経路が、類型の別を問わず言語普遍的に存在する可能性

[1] 本研究は、2019 年～2023 年度科学研究費補助金研究「空間移動と状態変化の表現の並行性に関する統一的通言語的研究」（課題番号：19H01264；研究代表：松本曜）、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の一環である。

を提示した。このように、これまでに実際の言語使用における自律移動事象の言語化については、様々な言語に関してかなり多くの事実が明らかになってきた。

一方で、実際の発話に基づく使役移動事象の言語化の研究は未だ十分になされていない (cf. Mano et al. 2018)。本稿では古賀 (to appear) に引き続き、ビデオクリップを使用した実験的データに基づいて、日本語における使役移動事象の言語化をより広範に考察する。具体的には、古賀 (to appear) が扱った KICK 以外に PUT、CARRY、CALL[2]を加えた 4 つの使役手段による移動の言語化を分析することにより、使役手段の種類によって特定の意味要素の表現頻度や表現パターンが大きく変容することを指摘し、そのような差異を生み出す言語個別的および普遍的な要因を明らかにすることを試みる。

以下、2 節では移動にかかわる意味要素と Talmy (1985, 1991) による移動表現の類型を簡潔に紹介し、3 節ではデータに関して必要な説明を行う。4 節で日本語の使役移動事象の言語化を詳細に考察し、5 節で結論を述べる。

2. 移動にかかわる意味要素と Talmy（1985, 1991）による移動表現の類型

まずは、例を見ながら移動にかかわる意味要素を確認しよう。

(1) a. John <u>ran</u> **out** of the room toward me.　　b. John <u>kicked</u> the ball **out** of the room.

(2) a. 太郎は部屋に<u>走って</u>**入って**きた。　　b. 太郎は部屋にボールを<u>蹴り</u>**入れた**。

外的な働きかけがあるかどうかにかかわらず、空間において位置を変化させる移動物のことを図 (figure) 、図の位置や移動を規定するため基準・参照点となるものを地 (ground) という。(1a) の *John*、(1b) の *the ball*、(2a) の「太郎」、(2b) の「ボール」は図を、(1a-b) の *the room*、(2a-b) の「部屋」は地を指す。図が辿る軌跡を経路 (path) と呼ぶ。英語では (1a) と (1b) のいずれにおいても不変化詞の *out* によって経路 OUT が表されている。一方日本語においては、(2a) では「入る」という自動詞、(2b) では「入れる」という他動詞で経路 INTO が表示されている[3]。図の移動に付随する、または移動を生じさせる事象を共事象 (co-event) という。(1a) の *ran*、(2a) の「走って」によって表される様態 RUN、および (1b) の *kicked*、(2b) の「蹴り」によって表される使役手段 KICK がそれにあたる。最後に、(1a) の前置詞句 *toward me* および (2a) の動詞「くる」によって表される、話者を基準とした移動の方向性を直示 (deixis) という[4]。Talmy の枠組みでは直示は経路の一種とされているが、本稿では両者を区別する[5]。

次に、事象とそれを描写する言語表現の区別を確認しておく。図が自らの意志で位置を変化

---

[2] 移動にかかわる意味要素（様態、使役手段、経路、直示）の諸概念は大文字のアルファベットで表記する。
[3] 正確には、INTO (TO IN) という経路は TO という経路局面と IN という経路位置関係を表す。
[4] つまり、直示は話者を地とする方向 TOWARD を表す。
[5] ここでは詳しく論じないが、ネワール語のように経路は副詞や後置詞などで、直示は主動詞で表現する言語が存在するため、直示を経路の一種とするのには問題がある（松瀬 2017）。ドム語にも同様の問題が生じる（千田 2017）

させる事象、または外的な要因（働きかけ）が特定されない状況で図（モノ）が位置を変化させる事象を自律移動事象 (self-motion event) と呼ぶ[6]。これに対し、図が外的な働きかけ（使役主による図への働きかけ）によって位置を変化させられる事象を使役移動事象 (caused-motion event) と呼ぶ。一方、(1a) や (2a) のように、図が文（より正確には節）の主語である表現を主体移動表現 (figure-subject construction) と呼び、(1b) や (2b) のように図を目的語とする客体移動表現 (figure-object construction) と区別する。後に見るように、使役移動事象が必ずしも客体移動として表現されるとは限らず、主体移動として表現されることが少なくないため、この区別は重要である。

Talmy (1991) は移動にかかわる意味要素のうち特に経路に注目し、この情報が文のどの形態統語要素によって表現されるかに応じて、言語を 2 つの主要なタイプに分類した[7]。(1) の英語を含むゲルマン諸語やロシア語を含むスラブ諸語では、経路が不変化詞や動詞接辞といった動詞に付随する要素 (satellite) で主に表現されるという。これらの言語は付随要素枠付け言語 (satellite-framed language) と呼ばれる。一方、フランス語やスペイン語をはじめとするロマンス諸語や (2) の日本語では、経路が主に主動詞によって表現される。このため、これらの言語は動詞枠付け言語 (verb-framed language) と呼ばれる。主動詞という形態統語要素に注目した場合、(1) の英語を始めたとした付随要素枠付け言語では、この位置で共事象である様態や使役手段が表示されるのが一般的である。つまり、語彙化の類型[8]においては、主動詞に移動の事実 (fact of motion) と様態が包入される様態包入言語（manner-incorporating language）に概ね相当する。一方、日本語などの動詞枠付け言語では主動詞に移動の事実と経路が包入される[9]。このような経路包入言語 (path-incorporating language) では、様態は (1a) のように動詞の非定形で表示されるのが典型的である[10, 11]。

先に述べた Talmy の類型論の問題点の 1 つとして、多くの付随要素枠付け言語において、付随要素の定義（「名詞句補語と側置詞句補語以外の、動詞語幹と姉妹関係を結ぶ構成素」）から外れる要素によって経路が表されるという事実がある (Talmy 2000: 102)。例えば英語でも、(2) の日本語の例に対応する *Taro ran into the room* (cf. (2a))、*Taro kicked the ball into the room* (cf. (2b))

---

[6] この定義からわかる通り、ここで言う自律移動事象は Talmy の言う self-agentive motion と non-agentive motion の両方を含む。また、使役移動事象は Talmy の agentive motion にあたる。

[7] Talmy (2005) は、経路（または中核スキーマ）がマクロ事象全体の時間的枠組みを決定するという点から、この類型を Motion-framing typology と呼んでいる。

[8] Talmy (2005) は、（主）動詞が文の命題を起動させる点（主動詞に fact of motion が含まれている事実と関連）に注目し、語彙化の類型を Motion-actuating typology と読んで註 7 の事象統合の類型と区別している。

[9] 実際には、スペイン語や日本語を含む多くの動詞枠付け言語では、経路が非限界的 (atelic) 、または境界越え (boundary crossing) を含まない場合には、「線路に沿って歩いた」や「駅に向かって走った」というように主動詞を様態で表現することが可能なため、split type とされている(Aske 1989; Slobin 1997; Slobin and Hoiting 1994; Talmy 2000)。

[10] アツゲウィ語やナヴァホ語のように動詞語幹に移動の事実と図に関する情報（形や材質など）を包入する図包入言語 (figure-incorporating language) は、事象統合の類型においては付随要素枠付け言語に含まれる。

[11] もちろん、この対応はあくまで傾向である。例えば、ネワール語では経路が副詞や後置詞などで表現されるため、付随要素枠付け言語と考えられるが、様態は日本語同様、副動詞によって表現される（松瀬 2017）。また、バスク語（フレンチ・バスク）は動詞枠付け言語と考えられるが、様態は動詞の非定形ではなく、副詞によって主に表現される（Ishizuka 2019）。

では、経路が前置詞 *into* によって表示されている。また、ハンガリー語を含むフィン・ウゴル諸語では、地を表す名詞句に付く格標識によって様々な種類の経路が表される（江口 2017）。このような問題点を踏まえ、経路が表示される形態統語要素が、主動詞なのかそれ以外なのかを分類の指針に据える立場もある (Matsumoto 2003; 松本 2017a)。紙幅の制約のため、ここでは立ち入らないが、枠付けという概念にも問題があるため（松本 2017a を参照）、本稿では松本 (2017a) にしたがい、経路主要部表示型言語と経路主要部外表示型言語という用語を採用する[12,13]。

3. データについて

本稿で使用するデータは、国立国語研究所のプロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」のために作成されたビデオクリップ（A 実験）に基づく。プロジェクトでは同一の刺激を使用して、約 20 の言語の母語話者からデータの収集を行った。日本語の被験者は 22 人である。

A 実験のビデオクリップは、自律移動事象、使役移動事象、視覚移動事象 (visual-motion event) の 3 つのタイプの事象を含むが、本稿では視覚移動事象は扱わない。4 節から使役移動事象の言語化を詳細に考察するが、自律移動事象の言語化と対比することもあるため、この 2 つのタイプの事象にかかわるデータを以下で説明する。

自律移動事象については、3 つの様態 (M: WALK, RUN, SKIP) と 3 つの経路 (P: TO, INTO, UP) と 3 つの直示 (D: TOWARD SPEAKER, AWAY FROM SPEAKER, NEUTRAL ; 以下，それぞれを TWD S, AWYFRM S, NEUT と略す) を各々1 つ組み合わせた 27 のクリップが存在する。すべてのクリップにおいて図はヒト（友人という設定）である。経路 TO の場面では開けた平面を自転車またはカメラのところ（地＝着点）に、INTO の場面では公園にある休憩所（地＝着点）の外から中へ、UP の場面では階段（地＝中間経路）の下から上へと図が移動する。

使役移動事象は、開始時使役 KICK、操作使役 PUT、随伴運搬使役 CARRY、言語行為使役 CALL という 4 つの使役手段 (MNS) のいずれかを含む[14]。このうち、KICK の場面は自律移動事象と同様の 3 つの経路と 3 つの直示を含む 9 つのクリップがある。その他の 3 つの使役手段については、3 つの直示と経路 INTO のみを考察対象としているため、3 クリップずつ存在する。

---

[12] Talmy (1991, 2000) の事象統合の類型論では、共事象（様態や原因など）と経路の両方を表す単一の節（マクロ事象を表す表現）のみを対象とする。つまり、様態や使役手段が表されていない表現（cf.「太郎が部屋に入った」）に対して、付随要素枠付け型 vs. 動詞枠付け型という区別は適用されない。一方、経路主要部 vs. 経路主要部外表示型という類型はこの限りではなく、マクロ事象を表さない表現にも適用される (Matsumoto 2019)。

[13] タイ語などの動詞連続言語では主要部を 1 つの動詞に決めることが難しい。松本 (2017a) は、Slobin (2004) が均等枠付け言語 (equipollently-framed language) と名付けるタイ語のような言語を、経路共主要部表示型言語として、経路主要部表示型言語、経路主要部外表示型言語と区別する。

[14] ここで言う開始時使役とは、使役行為が被使役主である図の移動の開始時のみに限定されるものであり、使役主から図への働きかけ、つまり使役行為が図の移動の最中に継続的に行われる継続使役と対立する (Talmy 2000)。操作使役とは、典型的には手を使って使役主の身辺に図を移動させる事象を指し（身体部位の移動はあるものの使役主自身は移動しない）、継続使役の一種である。また、随伴運搬使役とは、使役主が図と共に位置を変化させる事象であり、やはり継続使役の一種と考えられる。最後に、言語行為使役とは、言語行為（例えば「命令」など）によって図を移動するように仕向ける使役事象を指す。

KICK + TO の場面では、開けた平面で使役主である友人が、図であるボールを地である自転車、またはカメラのところに移動させる。KICK + INTO の場面では、友人がボールを休憩所の外から中へ、KICK + UP の場面では友人がボールを石垣の上に移動させる。PUT の場面では、使役主が図である本を地である鞄の中に手を使って移動させる。CARRY の場面では、使役主が図である机を地である休憩所の中に運んで移動させる。CALL の場面では使役主であるマリアが図である友人の名前を呼ぶことによって、友人を休憩所の中に移動させる。

被験者は映像には現れないカメラを自分と同一視するよう指示されている。したがって，カメラの方向への図の移動が TWD S，カメラから離れる移動が AWYFRM S，カメラの前方を横切るような，近づくことも遠ざかることもないような移動が NEUT という直示情報となる[15]。例えば、カメラの近くにいる友人がボールを蹴って自転車のところに移動させる事象 (KICK + TO + AWYFRM S) を「友人がボールを自転車の方へ蹴った」、友人が机を抱えて休憩所の中のカメラの方に移動させる事象 (CARRY + INTO + TWD S) を「友人が休憩所の中に机を運んできた」というように被験者は描写した。

4. 日本語の使役移動事象の言語化

4. 1. 自律移動事象と使役移動事象の言語化に見られる相違点

日本語の使役移動事象の言語化に見られる特徴を浮き彫りにするために、まずは日本語の自律移動事象の言語化と比較してみよう。古賀 (2016) が示す通り、日本語の自律移動事象の言語化に見られる 1 つの顕著な特徴は、(3) が例示するように直示が主動詞よって非常に高頻度で表現されることにある。(3) のように、日本語では自律移動事象はすべて主体移動として表現されている。

(3) a. 友人が自転車の方に歩いていった。 (A17-02)[16]
b. 友人が休憩所の中に駆け込んできた。 (A20-14)
c. 友達がスキップして階段をのぼっていった。 (A06-27)

日本語の自律移動事象の描写における直示の平均指定回数[17]は、プロジェクトで調査した 19 言語中 4 位の 1.15 であり、19 言語の平均である 0.79 を大きく上回る[18]。また、図 1 から明らかな

[15] 厳密には、TWD S、AWYFRM S、NEUT は事象タイプを表す。表現タイプとしては、日本語であれば「くる」（TWD S 場面で典型的に使用される）と「行く」（典型的に TWD S 以外の場面で使用される）という二項対立となる。

[16] 例文の横に付けられたこれらの番号は、被験者番号とクリップ番号を指す。このような番号がない例文は作例である。

[17] 平均指定回数とは、当該の意味要素（e.g. 直示、様態など）が 1 クリップで表現された回数の平均を指す。「こっちに走ってくる」（直示の二重指定）、「休憩所の中に入っていく」（経路の二重指定）のような多重指定があるため、値が 1 を超えることがある。図 2、図 6、図 7 のような指定率を示したデータは、多重指定をカウントしていないため（ゼロ回か一回以上指定されたかを見ている）、上限値が 1 となっている。

[18] 日本語（古賀裕章・吉成祐子）、日本手話（今里典子）、英語（秋田喜美・松本曜・眞野美穂）、ドイツ語（高橋亮介）、ロシア語 (Anna Bordilovskaya)、フランス語（守田貴弘）、イタリア語（吉成祐子）、ハンガリー語（江

ように、実に 90%以上の確率で直示情報が主動詞の位置を占めている（M は様態、P は経路、D は直示を表す）。

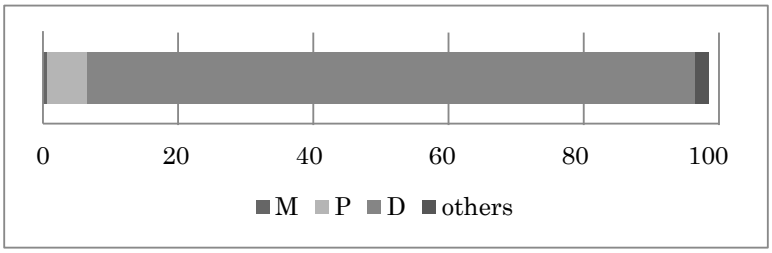

図 1：日本語自律移動事象の言語化における主動詞概念

一方、使役移動事象の言語化における直示情報の平均指定回数は、18 言語の平均である 0.60 を辛うじて上回る 0.62 であり、7 位にとどまる[19]。この値自体は他言語と比較してそれほど低い値ではないものの、日本語の自律移動事象の表現における直示の指定回数と比較すると、かなり低くなっていることがわかる。自律移動事象の言語化において、非常に高い直示への言及回数を誇るネワール語（1.26 で 3 位）は、使役移動事象の言語化においても 0.93（3 位）とかなり高い指定回数を保持している。自律移動事象と比較して、使役移動事象の描写においては直示の表現頻度が低下する通言語的傾向が見られるが、この理由については後に論ずる。

自律移動事象の描写においては、共事象である様態の種類によって直示の表現頻度が異なることはなく、一貫して主要部を使用して頻繁に表示される。一方、使役移動事象の描写においては､図 2 が示すように共事象である使役手段の種類に応じて直示の表現頻度が大きく異なる。さらに、図 3 からわかる通り、使役手段 (MNS) の別に応じて主要部で表示される意味要素も大きく変動する（等位節を含む文の場合、文末の等位節の動詞を主要部動詞として扱う）。

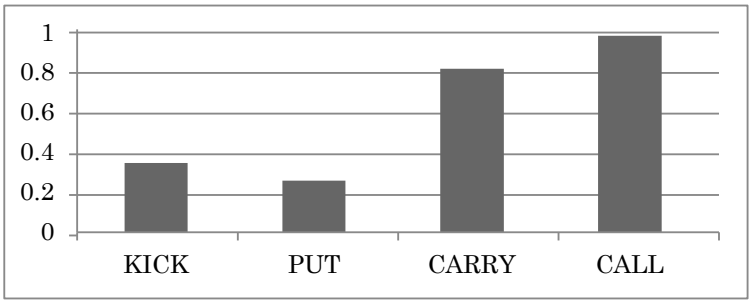

図 2：使役移動事象の言語化における使役手段別直示指定率（INTO 場面）

口清子)、クプサビニィ語（河内一博)、シダーマ語（河内一博)、スワヒリ語 (Monica Kahumburu)、中国語（小嶋美由紀)、タイ語（高橋清子)、ネワール語（松瀬育子)、タガログ語（長屋尚典)、モンゴル語（バドマ)、ユピック語（田村幸誠)、イロカノ語（山本恭裕)、バスク語（石塚政行）の 19 言語。なお、イロカノ語とバスク語は、実際にはこのプロジェクト終了後に付け足された。

[19] 註 18 の 19 言語から、データの上がっていないユピック語を除いた 18 言語。

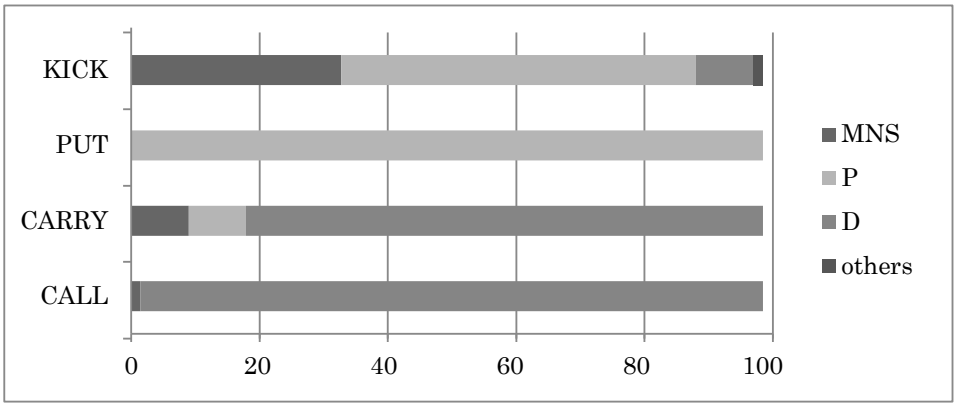

図 3：使役移動事象の言語化における使役手段別主要部概念（INTO 場面）

また、自律移動事象の言語化においては、様態が SKIP の場合には従属節で表現される傾向が観察されるものの (e.g.「友達がスキップをしながら休憩所の中に入ってきた」(08-16))、図 4 が示すように、使用される構文としては [副動詞＋主動詞] (e.g. 前掲 (3) の「歩いていった」、「駆け込んできた」、「のぼっていった」) が 8 割以上を占める。

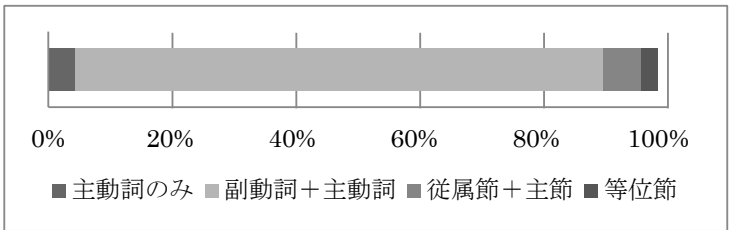

図 4：自律移動事象の描写に使用される構文・表現パターン

これに対し、使役移動事象の描写において使用される構文は、図 5 から明らかなように使役手段の種類に応じてかなり違いを見せる。

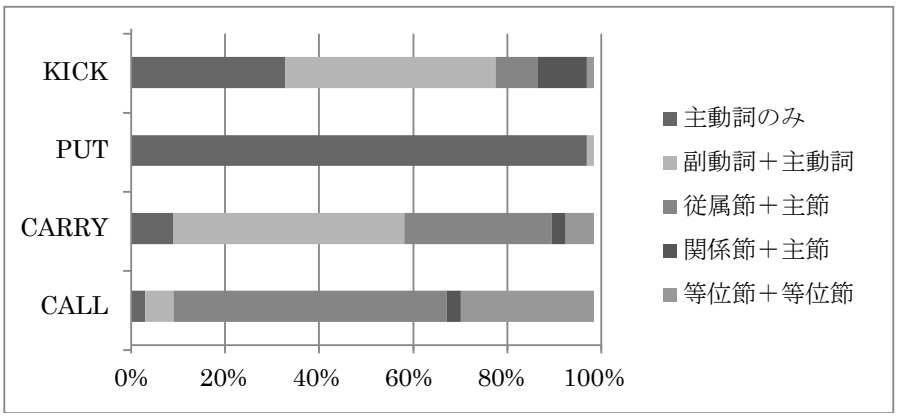

図 5：使役移動事象の描写に使用される構文（使役手段別；INTO 場面）

以上の観察から浮かび上がってきた問いを以下にまとめる。

(4) a. 自律移動事象の言語化においては非常に高頻度に表示されていた直示情報（平均指定回数 1.15）が、なぜ使役移動事象の言語化においては頻度が大幅に低下するのか（平均指定回数 0.62）。図 2 からわかるように、KICK 場面および PUT 場面において直示の表現頻度がかなり低く、全体の直示表現頻度を大きく引き下げる原因になっている。これはなぜだろうか。他方、CARRY 場面および CALL 場面においては自律移動事象の場合と同様に直示の表現頻度が高い。これはなぜだろうか。

b. 図 3 に見られるように、使役移動事象の言語化においては、共事象である使役手段の種類に応じて主要部で表示される概念に大きな違いが認められる。例えば、KICK 場面においては 3 割以上の確率で、英語やロシア語などと同様に主要部で使役手段 (KICK) を表示する経路主要部外表示型の表現になっている。また自律移動事象の言語化においては、主要部で表示される割合が 1 割にも満たない経路情報が、PUT の場面では 100%主要部で表示される。これらはなぜだろう。

c. 使役移動事象の言語化においては、自律移動事象のそれとは異なり、使用される構文または表現パターンが使役手段によって大きく異なる。例えば、CARRY や CALL の場面では従属節や等位節の使用が増加するが、これはなぜだろうか。

以下では、使役移動事象の言語化を使役手段別に詳細に考察しながら、(4a-c) の問いに答えを与えていく。

4. 2.　KICK 場面について

KICK 場面の描写において直示情報の表現頻度が低い理由、主要部で使役手段を表す経路主要部外表示型の表現パターンが増える理由、および [主動詞のみ] の構文が増加する理由は、すでに古賀 (to appear) で詳細に議論した。以下に要点をまとめる。

4. 2. 1.　KICK 場面において直示の表現頻度が低い理由

経路主要部表示型言語において使役移動事象を客体移動として表現する場合、(5) が示すように経路を表す語彙的使役動詞が必要とされる。

(5) a. 友達が休憩所の中にボールを蹴って入れた。　(A08-36)

b. *友人がボールを休憩所の中に蹴って入った。[20]

[20] もちろん「友人がボールを蹴って、友人が休憩所の中に入った」という 2 つの動詞の主語が一致した解釈は可能だが、ここで意図しているのは「友人がボールを蹴って、ボールが休憩所の中に入った」という 2 つの動詞の主語が一致しない解釈である。

c. *友人がボールを蹴って休憩所の中に入らせた。

(6) a. wiN3 khUn3 ban1day1 maa1 (A6-22)
走る あがる 階段 くる
‘(友人が) 階段を上がってきた。’

b. phUan3 te?2luuk3 bOOn1 khUn3 maa1 (A9-37)
友人 蹴る ボール 上がる くる
‘友人がボールを（私の方へ）蹴り上げた。’

客体移動表現は他動詞文であるため、主要部で経路を表示するには経路を語彙化した他動詞（使役述語）が要求されるわけである。使役手段も他動的事象を表すため、他動詞によって表現される。結果として、経路主要部表型言語では主体移動表現の場合と同じく、客体移動表現においても使役手段を表す副動詞（テ形・連用形動詞）と経路を表す主動詞の主語が (5a) のように一致するパターンとなる (Bradshaw 1993; 松本 1998)。(6) のタイ語や中国語のような動詞連続構文を有する言語とは異なり (Lamarre 2017; 高橋 2017)、日本語では (5b) に見られるように使役手段を表す動詞の目的語が経路を表す動詞の（意味上の）主語に切り替わる項の共有パターン (switch-subject) は許容されない[21]。また (5c) からわかる通り、図がモノである場合には自動詞「入る」に使役形態素を付加した形態的使役述語を使用して主語を一致させても文が成立しない。したがって、経路主要部表示型のパターンを維持することができるかどうかは、どれだけ広範な種類の経路を表す語彙的使役動詞を有するかにかかっている。日本語には、イタリア語やフランス語よりもかなり広い範囲の経路を表す使役動詞が存在する (松本 1997)。

経路と同様に、客体移動表現において直示を表現するためには直示を表す語彙的使役動詞が必要となる。日本語には「いく」に方向的に対応する「やる」、「くる」に対応する「よこす」という直示動詞が存在するものの、これらの動詞は経路 TO の場面にそれぞれわずか 1 例観察されるのみである。(7) に例を挙げる。

(7) a. 私の隣にいた友人がボールを蹴って自転車のところにやった。 (A02-32)
b. 友人がこちらにボールを蹴ってよこしました。 (A05-31)

日本語の自律移動事象の言語化、すなわち主体移動表現において直示が頻繁に表現される 1 つの大きな要因は、副動詞構文によって他の意味要素と競合なく主動詞の位置で直示を表現できるという構造的特徴にある ((3b) に見られるように、様態、経路、直示を、副動詞構文を使用することによってそれぞれ異なる動詞スロットで表現することが可能)。ところが、使役移動事

[21] 松本 (2017b) は、主体移動と客体移動という表現の違いに応じて、同じ経路を表現するのに異なる形式の動詞を必要とする日本語（やモンゴル語、シダーマ語などの副動詞言語）を特化要素言語と呼ぶ。一方、主体移動表現にも客体移動表現にも、同一の前置詞、不変化詞などで経路を表す英語（前置詞以外に接頭辞を使うドイツ語やロシア語）や、同一の動詞を使用するタイ語や中国語などを共通要素言語と呼んで区別する。

象を客体移動として表現しようとした場合、「やる」、「よこす」がこのように著しく生産性を欠いているがゆえに、実質（主）動詞で直示を表現する手段を失っているに等しい。これが KICK 場面で直示の表現頻度が低い主な要因であり、(8) のように生産的な語彙的使役直示動詞を持ち、これを使用して直示を頻繁に指定するネワール語と決定的に異なる点である (松瀬 2017)。

(8) a. pāsã̄:　ba:l　satal-e　du-ne　thwānā　hala　(A17-34)
友達.ERG　ボール　休憩所-LOC　中に-LOC　蹴る.CM　よこす.NFD
‘友達が休憩所の中にボールを蹴ってよこした。’
b. wa　pāsã̄:　pa:khā　puika　ba:l　thwānā　chwala　(A11-36)
その　友達.ERG　壁　向こうに　ボール　蹴る.CM　やる.NFD
‘その友達はボールを蹴って壁の向こうにやった。’

主体移動表現においては直示専用のスロット（主動詞）を持つ日本語は、図 6 が示すようにこのスロットを活用して 3 種類の直示の区別すべてに一貫した注意を向けている (古賀 2016)。

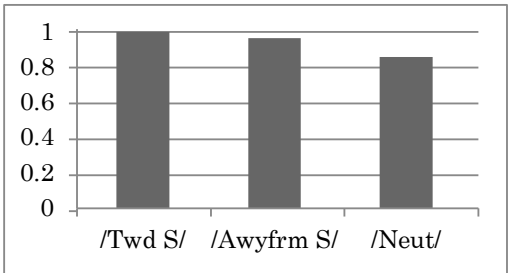

図 6：自律移動の描写における直示指定率

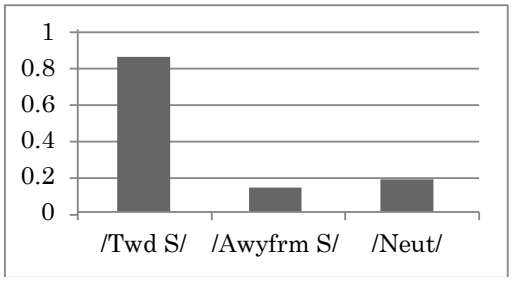

図 7：使役移動の描写における直示指定率

一方、使役移動事象の言語化においては、TWD S の場面では直示が頻繁に表現されるのに対し、AWYFRM S と NEUT の場面では直示の表現頻度は非常に低いことが、図 7 から見て取れる。これは、TWD S は話者にとって直接影響を与えうる認知的に際立った情報であるため、文の成立に必須の要素ではない後置詞句を使用してまでこの情報を表示しようという被験者の選択を反映している。また、TWD S の場面では語彙的使役直示動詞の欠如を補うべく、(9) のような逆行構文が 56.1%の割合 (TO、INTO、UP のすべての経路＋TWD S の 66 例中 37 例) で使用され、直示を表現している事実は注目に値する (古賀 2008; Shibatani 2003)。逆行形式の「てくる」は補助動詞化しており、文の項構造に貢献しないため、直前の動詞を主動詞としてコーディングしている（e.g. (9a) の「蹴り込んできた」では「込む」が主動詞)。

(9) a. 友人が休憩所の中にボールを蹴り込んできた。　(A07-34)
b. 友人が私のもとにサッカーボールを蹴ってきた。　(A11-31)

一方で、AWYFRM S と NEUT は認知的にコストのかかる付加的な要素を使用してまで表示さ

れなければならない情報ではないと判断され、かなりの頻度で無視されている。このため、KICK 場面においては全体的な直示の言及率が伸びない。ただし、古賀 (to appear) でも指摘した通り、「てくる」を使用した逆行形式と対立する順行形式は、「ていく」を使用できないため（e.g.「*友人が休憩所の中にボールを蹴っていった」）無標の動詞となる。よって、逆行形式「てくる」を使用して TWD S を表現した話者は、実際には無標の形式（e.g.「友人が休憩所の中にボールを蹴った」）を使用することで TWD S 以外の直示を表していたと解釈できる。この点を考慮した場合、図 7 の AWYFRM S と NEUT の場面での直示指定率はかなり増加することになる。

図 3 からわかるように、直示が主要部で表現される例が 1 割ほどあるが、これについては後に議論する。

4. 2. 2. KICK 場面において主動詞で使役手段が比較的頻繁に表示される理由と、[主動詞のみ]の表現パターンが増加する理由

前節で議論した通り、日本語には客体移動表現に必要な、生産的な語彙的使役直示動詞が存在しないため、主体移動表現とは異なり、主動詞で直示を表現することができない。代わって主動詞の位置を最も頻繁 (5 割強) に占める意味要素は (10) に見られるように経路である。経路が主要部で表示される (10) のような例の表現パターンは、[副動詞＋主動詞] が大半である[22]。図 3、図 5 の KICK 場面は、経路が INTO のもののみであることに注意されたい。

(10) a. 友人はボールを休憩所の中に蹴り入れた。 (A02-36)
b. 友達が休憩所の中にボールを蹴って入れた。 (A08-36)

このような表現パターンは、経路主要部表示型言語に典型的なパターンである。

自律移動事象の言語化においては、経路が INTO や UP の場合には様態を主動詞にした「*友人は休憩所の中に歩いた」、「*友人は階段を上の方に走った」のような表現は成立しない。ところが、使役移動事象の言語化においては、経路を主動詞で表現する選択肢があるにもかかわらず、(11) のような使役手段を主動詞とした表現が INTO と UP のどちらの場面でも可能であるし、実際この表現パターンが 3 分の 1 の割合で観察される[23]。[主動詞のみ] の構文が 3 割強存在するのはこのためである。

(11) a. 友人が休憩所の中にボールを蹴った。 (A07-36)
b. 友達がボールを崖の上に蹴った。 (A20-38)

---

22 「友人はボールを蹴って休憩所の中に入れました」(A14-34) のように、使役手段動詞と使役経路動詞が隣接していない例は [従属節＋主節] という表現パターンであるため、主動詞概念が経路であるからといって使用構文が必ずしも [副動詞＋主動詞] にはならない。

23 このような使役手段を主動詞にした客体移動表現が成立する理由を明らかにする必要があるが、それは別稿に譲ることにする。

この表現パターンは、英語やドイツ語などと同じ経路主要部外表示型のパターンである。

経路が TO の場面においては、主動詞で使役手段が表現され、[主動詞のみ] の表現パターンとなる割合が 80%以上にのぼる。このような主動詞概念や表現パターンの変異は、使役移動事象の言語化において特に姿を現す。(12) が示すように、経路 TO は自律移動の言語化においても 1 割ほどの例外を除いて動詞では表されず、後置詞によって表示される。

(12) a. 友達がこちらに歩いてきた。　(A03-28)
　　b. 友人が自転車に向かってスキップしていった。　(A07-08)

このような主体移動表現の場合、経路が動詞で表現されずとも主要部で直示が、その直前の副動詞で様態が表現されるため、主要部概念および使用構文 ([副動詞＋主動詞]) ともに、経路が動詞で表現されている (3b)、(3c) と同様となる。ところが、客体移動表現においては直示を主動詞で表現する選択肢がないため、経路が後置詞によって表示された場合、(13) のようにおのずと使役手段が主要部を占めることとなり、経路主要部外表示型のパターンになるのである。

(13) a. 友達は私に向かってボールを蹴りました。　(A22-31)
　　b. 友達が自転車のそばまでボールを蹴った。　(A09-33)

このように、経路や直示を表す語彙的使役動詞の欠如が 1 つの大きな要因となり、松本 (2017a) が指摘するように、経路主要部表示型言語では使役移動事象の言語化において、その表現パターンを維持することが困難になり、主要部外表示型の表現パターンを多く見せることとなる。

4. 3.　PUT 場面について

図 2、図 3 で確認した通り、PUT の場面においては直示の表現頻度が最も低い。日本語に生産的な語彙的使役直示動詞が存在しないという事実だけが、この理由とは考えられない。というのも、ネワール語のように生産的な語彙的使役直示動詞を有する言語ですら、図 8 が示すように PUT 場面においては直示の表現頻度がかなり低い。

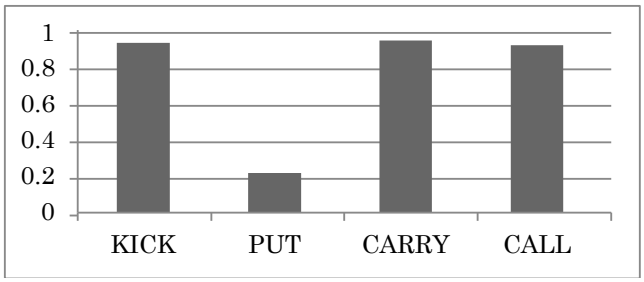

図 8：ネワール語の KICK 場面における使役手段別直示指定率

(14) のタイ語のように 5 割を超える表現頻度を示す例外はあるものの、PUT 場面においては通言語的に直示への言及頻度が低いと言える。

(14) phUan3	?aw1	naN4sUU5	say2	khaw3	maa1	nay1	kra1paw5	chan4.
友達	取る	本	入れる	入る	くる	中に	鞄	1SG

‘友達が本を取って、私の鞄の中に（私の方に）入れた。’ (A02-43)

これは松本 (2017c) が指摘するように、手に持った本（図）を鞄（地）の中に移動させるという操作使役 PUT の場面では、移動が動作主の身辺に限定されているがゆえに、話者の領域（直示的中心）の外側から中側へ、または話者の領域内からその外側へといった話者を基準とした相対的な方向が意味を持ちにくい、という事実にその原因が求められる。

鞄の中に本を移動させる行為が、最も典型的な手を使用して行われるため（つまり、操作使役）、使役手段は表示されない（日本語では使役手段が表現された例は皆無）。よって (15) のように、経路 INTO を表す使役移動動詞「入れる」がすべての例で主要部を占め、すべて経路主要部表示型のパターンに合致した表現となる。

(15) a. 友達が本をバッグの中に入れた。 (A01-45)

b. 友達が私が持っている鞄の中に本を入れてくれた。 (A20-43)

TWD S の場面では、(15b) のように「てくれる」を使った逆行構文で直示を表現した例が 7 例 (66 例中 7 例で 10.7%) 見られる。(9) の逆行形式「てくる」と同様に、逆行形式「てくれる」は項構造に貢献しない補助動詞であり、主動詞はあくまでも経路動詞である。また、使用構文は「差し入れた」という [副動詞＋主動詞] という 1 例を除いて、すべて [主動詞のみ] である。

日本語と同じく経路主要部表示型言語とされるイタリア語やフランス語には、日本語の「入れる」に対応する、経路 INTO を表す使役動詞存在せず、英語の *put* にあたる動詞を主動詞に据え、経路を前置詞で表現するという経路主要部外表示型の表現パターンとなる (守田・石橋 2017; 吉成 2017)。(16) はイタリア語の例である。

(16) La	ragazza	mette	il	libro	dentro	la	borsa.	(A06-44)
DEF	女性	puts	DEF	本	中に	DEF	鞄	

‘その女性は本を鞄の中に入れた。(cf. The girl puts the book into the bag.)’

また、中国語の経路 INTO を表す動詞「进」はそれ単独では使役的行為（「入れる」にあたる行為）を表すことができず、(17) に見られるように別の他動詞「放」が必要とされる。

(17) Péngyou　bǎ　shū　fàng　jin　le　wǒde　bāo　li.　(A03-43)
朋友　把　书　放　进　了　我的　包　里。
友達　OBJ 本　put　はいる　完了　私の　鞄　中
‘友達が本を私の鞄の中に入れた。’

このため、中国語では日本語や英語をはじめとした多くの言語とは異なり、PUT の場面においても [主動詞のみ] の表現パターンを取ることができない。

4. 4.　CARRY 場面について

4. 4. 1.　CARRY 場面で直示情報が頻繁に表現される理由

図 3 からわかるように、CARRY 場面においては KICK、PUT 場面とは異なり、主要部で直示が表現される割合がかなり高く、80%以上にのぼる。これには主に 3 つの理由がある。

まず 1 つ目の理由は、CARRY を使役手段とした使役移動事象は、37.9%の割合で (66 例中 25 例) 主体移動として表現されている。(18) に例を挙げる。

(18) a. 友達が椅子を抱えて中に入ってきました。　(A03-40)
b. 友達がガーデンチェアを持って歩いて休憩所の中に入ってきました。　(A14-40)
c. 椅子を持った友達が休憩所の中に入ってきた。　(A10-42)

図 1 や図 6 で確認した通り、日本語の主体移動表現においては、専用のスロット（主動詞）を使用して直示が頻繁に表示される。CARRY 場面についても同様に、この事象が主体移動として表現されている 25 例中すべてにおいて、(18) が例示するように直示が主動詞の位置を占めている。

2 つ目の理由は、「持つ」という動詞と直示動詞によって構成される複雑述語が使用される例が 24.2% (66 例中 16 例) 観察される。(19) がその例である。

(19) a. 友達が休憩所の中に椅子を持っていった。　(A13-42)
b. 友人が休憩所の中に折りたたみ椅子を持ってきた。　(A20-40)

「持つ」という動詞は、「友達が休憩所の中に椅子を持った」が成立しないことから明らかなように、それ自体移動を表さない。移動を表しているのはあくまでも直示動詞である。よって、(19) のような例は「椅子を持ったままの状態」で図である友人が休憩所の中に移動する事象を表す主体移動表現と考えられる。松本 (2017a: 21) は、このような表現を疑似客体移動表現と呼ぶ。疑似客体移動表現は機能上、随伴運搬という使役事象を表しているものの、実質、(18) のような主体移動と変わりがない。(19) からわかる通り、この表現パターンを選択した場合、経路 INTO が動詞では表示されない。

CARRY 場面の描写において直示の指定頻度が高い 3 つ目の理由は、(20) が例示するようにたとえ使役手段を表す動詞が使用されたとしても、自律移動を表す直示動詞がこれと共起可能であるという事実である。

(20) a. 友人が休憩所の中に椅子を運んでいきました。 (A05-42)
b. 友人が休憩所に椅子を運んできた。 (A12-40)

客体移動表現であるにもかかわらず、自律移動を表す直示動詞が使用可能なのは以下の理由による。随伴運搬使役の場合、使役主（動作主）は同時に図でもある。(20) において、主語である友人は椅子を運びながら休憩所の中に移動する主体であるため、自律移動事象をその意味に含む。つまり、「運ぶ」という動詞は使役手段を表す他動詞であるものの、後続する直示動詞「いく/くる」と主語を共有するため（友人が運んで、友人がくる）、主語一致の原則に従っている。ただし、「運ぶ」自体が移動をその意味に含むため、(19) のような疑似客体移動表現とは異なり、(21) が示すように直示動詞なしでも文が問題なく成立する。

(21) 友人が休憩所の中に椅子を運んだ。 (A07-41)

使役手段動詞「運ぶ」が使用された例が 24 例あった。このうち、5 例が主要部で経路を表示する、(22) のような経路主要部表示型の表現パターンである。

(22) a. 女の人が椅子を休憩所に運び入れた。 (A04-41)
b. 友人が椅子を休憩所の中に運び込んだ。 (A19-40)

残りの 19 例のうち、(20) のように直示が主要部で表現されたのが 13 例、(21) のような使役手段動詞の「運ぶ」が主要部の位置を占める経路主要部外表示型の表現パターンが 6 例あった。このように、客体移動表現であっても主語一致の原則を満たすため「いく/くる」が使役手段動詞と共起可能であるという理由で、直示情報が頻繁に表現される。

次の節に移る前に、経路の表現について補足しておく。CARRY の場面が主体移動として表現される例と、客体移動として表現される例が同数の 25 例ずつあった（客体移動表現は「運ぶ」を使用した 24 例と「入れる」が単独で使われた 1 例で計 25 例）。主体移動として表現された 25 例のうち、実に 24 例において (18) が例示するように経路が動詞で表示されている。一方、客体移動として表現された 25 例のうち、(22) のように経路を動詞で表現する選択肢があるにもかかわらず、実際に経路が動詞で表示されていた例はわずかに 6 例であった。これは、KICK＋INTO の場面において、「蹴り入れる」のように経路を動詞で表現する選択肢があるものの、3 割強の例で「休憩所の中に蹴る」のように動詞で経路を表示しない選択がされているのと共通している。

4. 4. 2.　CARRY 場面の描写における主要部概念とその表現パターン

前節で、CARRY 場面の描写において動詞による直示の表現頻度が高い理由を考察した。この動詞は主動詞であるため、CARRY 場面の言語化における主要部概念は 80%以上の確率で直示となる。残りの 2 割弱が (21) の使役手段が主動詞になる例と、(22) の経路が主動詞になる例にあたる。

一方、使用される構文に目を向けると、(19) の「持っていく/くる」という複雑述語を使った例や、(20) の使役手段動詞に直示動詞が後続する例、および (22) の使役手段と経路動詞の複雑述語といった [副動詞＋主動詞] の表現パターンが 5 割を占める。また、主体移動表現は (18a-b) のような [従属節＋主節] または (18c) のような [関係節＋主節] であり、このパターンが 34.8%を占める。また前節で議論したように、使役手段動詞「運ぶ」が使用された場合でも使役主が移動の主体であり、主語が一致することから「いく/くる」との共起が許容されるため、「運ぶ」が単独で表現される [主動詞のみ] のパターンはわずかに 9.1%となる。この点が KICK 場面と大きく異なる点である。

4. 5.　CALL 場面について

図 2、図 3 に見られるように、CALL 場面の描写においては、ほぼすべての例で直示が主動詞で表現されている。CALL が他の使役手段と異なるのは、図がヒトであり、このヒトが使役主からの呼びかけに応じて自らの意志で移動を行う点である。3. 1. 1 で議論したように、図がモノである場合には、経路動詞や直示動詞に使役形態素を付加することで、使役手段動詞と主語を一致させても文が成立しない。一方、図がヒトの場合には (23) のように問題なく成立する。また、(24) のように直示は表現できないものの、使役手段動詞と語彙的使役経路動詞を組み合わせた複合動詞で経路を表現することができる。

(23) a. 友人がマリアを呼んで休憩所に入らせた。(*友人がボールを蹴って部屋に入らせた)
　　b. 友人がマリアを呼んで休憩所に来させた。(*友人がボールを蹴って部屋に来させた)
(24) 友人がマリアを休憩所に呼び入れた。

しかし、データには (23)、(24) のような客体移動表現は 1 例も観察されず、66 例中実に 65 例において図（マリア）の移動の局面が主体移動として表現されている[24]。以下に例を示す。

[24] データに (23) や (24) のような例が全く現れなかった理由は、ビデオクリップ映像の性質によるかもしれない。CALL 場面において、使役主である友人の使役行為は図である女性にその名前（マリア）を呼びかける行為のみである。この使役行為が、図であるマリアに休憩所の中に移動するよう強く仕向ける行為として捉えられにくかった可能性がある。被験者からの反応を誘導してしまうため適切ではないだろうが、例えば使役主が「マリア、ちょっと」と呼びかけ手招きをするような仕草をすれば（この時点で純粋に CALL ではなくなるが）、(23b) のような発話が引き出せたかもしれない。また、友人ではなく自ら（被験者＝カメラ）が使役主でマリアに名前を呼びかけるという状況であれば、違う結果になった可能性もある。ビデオクリップ映像の性質に関係のない要因としては、4.6.1 で指摘した通り、「呼ぶ」という手段で引き起こされた移動とは理解しながらも、図

(25) a. マリアが友人に呼ばれて休憩所の中に入ってきました。 (A05-48)
b. 友達がマリアを呼ぶと、マリアは歩いて机の方に歩いていった。 (A01-47)
c. マリアは休憩所の中に入っていきました。 (A21-47)
d. 呼ばれた友達は休憩所に入ってきた。 (A06-46)

これらの例からわかるように、直示が 98.5%の確率で、かつ主動詞の位置で表示されているのは、(23)、(24) のような客体移動ではなく、主体移動として表現されていることに起因する。

図5の使用構文を見てみると、(25a) のような受身を使って主語を一致させた [従属節＋主節] のパターンが 59.1%を占める。これに続くのが (25b) のような [等位節＋等位節] であり、28.8%にのぼる。(25c) のように、使役手段（使役行為）を無視して移動の局面だけを主体移動で表現する例が 6.1% (4 例) ある。これらの例では、経路が動詞で表現されているため、[副動詞＋主動詞] のパターンになる。これ以外に、(25d) の[関係節＋主節] が 2 例、[主動詞のみ] が 2 例（「呼ぶ」が 1 例、「やってくる」が 1 例） 存在する。

このように使役手段（使役事象）とそれによって引き起こされた移動（結果事象）がそれぞれ別の節で表されるため、[従属節＋主節] や [等位節＋等位節] という複文の構造が大多数を占める。そして、主節や等位節は主体移動表現であるため、自律移動事象の言語化と同様、直示が主動詞で頻繁に表現されることになる。

4. 6. 残された 2 つの問題

この節では、次の 2 つの残された問題について考察する。1 つ目は、自律移動事象と比較して、使役移動事象の言語化においては通言語的に直示の表現頻度が低い傾向がある。これはなぜだろうか。2 つ目の問題は、使役手段の違いに応じて、表現形式の複雑さ、コンパクトさが異なる。これはなぜだろうか。

4. 6. 1. 直示について

3. 1 で述べたように、プロジェクトで調査した 19 言語の自律移動事象の言語化における直示の平均指定回数は 0.79 だったのに対し、18 言語の使役移動事象の言語化におけるそれは 0.60 とかなり低い。松本 (2017c: 271) はこの傾向について、直示は有性物、とりわけヒトの移動の描写に使用されることが多いため、モノが図となる客体移動表現に使用される頻度が主体移動と比較して低くなるという説明をしている。

本研究で考察した 4 種類の使役手段を含む使役移動事象の言語化に見られる傾向は、この松本の説を支持する。まず、日本語の CARRY 場面および CALL 場面の描写において直示が頻繁に表現される理由は、KICK 場面や PUT 場面とは異なり、どちらの場面においてもヒトの移動

が意志を持ったヒトであるため、ヒトの移動に重点を置いた主体移動表現を好む被験者が多かったとも考えられる。

がかかわっているという事実にある。CARRY 場面においては、使役主（動作主）が図である椅子を携行して地である休憩所の中に自らの意志で移動する。CALL 場面では、図であるヒト（マリア）が使役主から名前を呼ばれ、それを受けて自らの意志で地である休憩所に移動する。このように、この 2 つの事象は、使役移動事象でありながらヒトによる自律移動事象を含む。CARRY 場面と CALL 場面において、日本語でとりわけ直示の表現頻度が高いのは、前節で確認した通り主体移動表現をその描写に選択しているからである。これは、日本語の被験者が使役手段に言及しつつも、よりヒトの移動に重点を置いて表現していることにその原因があると考えられる。

松本の説を裏付けるもう 1 つの傍証として、KICK 場面の描写のうち、図であるボールを主語にした (26) のような主体移動表現において、どれだけ直示が表示されているかを調査した。図 3 から 1 割ほど直示が主要部で表示されていることがわかるが、それはこのような主体移動表現にあたる。図 3 は経路が INTO の場面に限られているが、ここでは TO と UP の場面も考察に含める。

(26) a. 友人が蹴ったボールが休憩所に入った。 (A02-35)
b. 友人がボールを蹴って、そのボールが自転車の方に向かっていった。 (A22-33)
c. 友人の蹴ったボールが石垣の上に上がった。 (A15-39)

KICK 場面の描写における (26) のような主体移動表現は 22 例 (TO 場面に 9 例、INTO 場面に 8 例、UP 場面に 5 例) 存在する。このうち、主動詞で直示が表現されている (26b) のような例は 14 例で 63.6%にとどまり、主動詞で直示が表現されていない例は 8 例で 36.4%である。これは、図 1 に見られるヒトが図である主体移動表現において直示が表現される割合の 91.4%と比較してかなり低い数値であると言える。また、TWD S の場面が主体移動として表現されているのは 22 例中 5 例であるが、この 5 例すべてで直示が主動詞で表現されている。数が少ないため一般化するのは困難だが、モノの移動の場合でもそれが話者の方向に向かっている場合には直示 (TWD S) が表現される傾向があるかもしれない。さらに大きなコーパスで検証する必要はあるであろうが、この結果は松本説を支持すると結論付けて良いだろう。

4. 6. 2.　表現の複雑さ、コンパクトさについて

図 5 からわかるように、使役手段の違いに応じて使用される構文のコンパクトさが異なる。3. 2 で確認した通り、PUT の場面の描写では 1 例を除くすべての例で単一の動詞（使役経路動詞「入れる」）、すなわち [主動詞のみ] が使用されている。一方、その対極に位置する CALL 場面の描写においては、3. 4.で見た通り [従属節＋主節]、[等位節＋等位節]、[関係節＋主節] といった複文が 90.9%の割合を占める。この両極の間に位置するのが、KICK 場面と CARRY 場面である。KICK 場面では、[主動詞のみ] のパターンが 33.3%、複雑述語を使用した単文である [副動詞＋主動詞] が 45.5%であり、これらを合わせると 8 割弱に相当する。CARRY 場面において

は、[副動詞＋主動詞] のパターンが 50%、[従属節＋主節] のパターンが 31.8%である。つまり、表現のコンパクトさに (27) のような序列が観察される。

(27) PUT > KICK > CARRY > CALL

Mano and Matsumoto (2019) が指摘する通り、(27) の序列は使役事象と結果事象の統合度の度合い、または両者の結びつきの緊密さを反映している。PUT という事象は使役主自らの手を使用した身体的行為を表す。この直接操作によって生じる結果事象（本が鞄の外から中へと位置を変化させる）は意図された通りに瞬間的に生起する。このため、PUT 場面で描かれる事象は使役的事象のプロトタイプと考えられ、この事象はその因果性の緊密さを反映してよりコンパクトな形式で表される (西村 1998)。一方、CALL という事象は身体的行為ではなく言語行為であり、被使役主（図）は意志を持ったヒトである。したがって、結果事象である被使役主の休憩所の外から中への移動は使役主の意志に委ねられることになる。このように、CALL 場面の表す事象は使役事象と結果事象の間の因果関係が緩やか、または間接的であるため、それを反映してより複雑な複文の形式を頻繁に取ることになる。開始時使役の KICK は PUT 同様に瞬間的な身体的行為を表すものの、結果事象であるボールの移動にはコントロールを持たない。対して随伴運搬使役の CARRY は使役主が被使役主（図）に継続的に働きかけるという点で結果事象に対してコントロールを有すると言えるが、この結果事象は使役事象の結果直ちに生起するものではない。使役事象と結果事象が時間的に重複しており (coextensive)、使役事象が使役主の自律的な移動の付帯状況（「持った/抱えた状態で」）として捉えられるため、複文のパターンが KICK の場面よりも多く使用される。このような理由で (27) のような表現のコンパクトの序列が生じると考えられる。

5. 結論

本稿では、実験的データに基づき、KICK、PUT、CARRY、CALL という 4 つの使役手段による使役移動事象の言語化を詳細に分析した。分析を通して、使役手段の違いに応じて特に直示の表現頻度に顕著な違いが認められること、主要部概念と使用される構文（表現パターン）が大きく変動することを指摘し、その理由を明らかにした。

日本語に見られる使役手段に応じたこのような違いは、どの言語にも同様に、または同じ程度に見られるわけではない。例えば英語においては、CALL の場面では約 6 割にとどまるものの[25]、KICK、PUT、CARRY の場面ではいずれも 9 割を超える確率で動詞 1 語、つまり [主動詞のみ] のパターンが使用されることから、使役手段が異なっても表現パターンがかなり安定していると言える。これはもちろん、英語が共事象を主要部で、経路を不変化詞や前置詞で表示する経路主要部外表示型言語であることにかなりの程度起因する。しかし、経路主要部表示

[25] この約 6 割の中には、*My friend called Maria into the pavilion* (14-48) のような客体移動表現のみでなく、*Maria came into the pavilion* (06-46) のような主体移動表現も含む。実際、前者は 3 割にも満たない。

型言語とされるイタリア語などは、表現パターンについては英語と比較的似た傾向を示す。このような経路主要部表示型言語内の多様性を生む 1 つの要因として、本稿でも議論した経路動詞のレパートリーの違いがある。日本語はイタリア語やフランス語のような経路主要部表示型言語よりもより広い範囲の経路を表す使役動詞が存在する。よって、日本語は使役移動事象の言語化においても、主要部で経路を表す経路主要部表示型のパターンをけなげにも維持しようと奮闘する。ここに日本語の興味深さが存在する。

本稿では 4 つの使役手段に限定して、使役移動事象の言語化を考察した。また考察対象の経路は KICK 場面を除いて INTO のみであった。さらに様々な使役手段や経路を考察することで、類型間および同一類型内の新しい多様性が見えてくることと思うが、それは別の研究を待つこととする。

略号一覧

CM	接続形	DEF	定冠詞	ERG	能格
LOC	所格	NFD	離接形非未来	OBJ	目的格
SG	単数				

参考文献

Aske, Jon (1989) Path predicates in English and Spanish: A closer look. *BLS* 16: 1-14.

Bradshaw, Joel (1993) Subject relationships within serial verb constructions in Numbami and Jabêm. *Oceanic Linguistics* 32-1: 133-161.

Croft, William, Jóhanna Barðdal, Willem Hollmann, Violeta Sotirova and Chiaki Taoka (2010) Revising Talmy's typological classification of complex events. In Hans Boas (ed.), *Contrastive Studies in Construction Grammar*, 201-236. Amsterdam: John Benjamins.

江口清子 (2017)「ハンガリー語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』39-64. 東京：くろしお出版.

Ishizuka, Masayuki (2019) Motion event descriptions in French Basque. *Poster presented at the International Symposium on Motion Event Descriptions across Languages* (MEDAL), Jan. 26th at National Institute for Japanese Language and Linguistics.

古賀裕章 (2016)「自律移動表現の日英比較—類型論的視点から—」藤田耕司・西村義樹（編）『文法と語彙への統合的アプローチ』219-245. 東京：開拓社.

古賀裕章 (to appear)「日本語における使役移動事象の言語化—開始時使役KICKを中心に—」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を紡ぐ』東京：くろしお出版.

Lamarre, Christine (2017)「中国語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』95-128. 東京：くろしお出版.

Mano, Miho, Yuko Yoshinari, and Kiyoko Eguchi (2018) The effects of the first language on the description of motion events: Focusing on L2 Japanese learners of English and Hungarian. In Izumi

Walker, Daniel Kwang Guan Chan, Masanori Nagami, and Claire Bourguignon (eds.), *New Perspectives on the Development of Communicative and Related Competence in Foreign Language Education*, 125-156. Berlin: Mouton de Gruyter.

Mano, Miho and Yo Matsumoto (2019) Causation across languages. *Paper presented at the International Symposium on Motion Event Descriptions across Languages* (MEDAL), Jan. 26th at National Institute for Japanese Language and Linguistics.

松瀬育子 (2017)「ネワール語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』65-94. 東京：くろしお出版.

松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実（編）『空間と移動の表現』125-230. 東京：研究社出版.

松本曜 (1998)「日本語の語彙的複合語における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83.

Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In Shunji Chiba et. al. (eds.), *Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403- 418. Tokyo: Kaitakusha.

松本曜 (2017a)「移動表現の類型に関する課題」松本曜（編）『移動表現の類型論』1-24. 東京：くろしお出版.

松本曜 (2017b)「移動表現の性質とその類型」松本曜（編）『移動表現の類型論』337-353. 東京：くろしお出版.

松本曜（2017c）「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』247-273. 東京：くろしお出版.

Matsumoto, Yo (2019) Path: Path coding across languages. *Paper presented at the International Symposium on Motion Event Descriptions across Languages* (MEDAL), Jan. 26th at National Institute for Japanese Language and Linguistics.

松本曜・河内一博・守田貴弘・長屋尚典・高橋清子 (2018)「移動表現の類型とそのコード化：通言語的ビデオ実験のよる移動表現の類型論再考」日本言語学会第157回大会ワークショップ. 於京都大学.

守田貴弘・石橋美由紀 (2017)「日本語とフランス語の移動表現—話し言葉と書き言葉のテクストからの考察」松本曜（編）『移動表現の類型論』275-302. 東京：くろしお出版.

西村義樹 (1998)「行為者と使役構文」中右実（編）『構文と事象構造』108-203. 東京：研究社出版.

Shibatani, Masayoshi (2003) Directional verbs in Japanese. In Erin Shay and Uwe Seibert (eds.), *Motion, Direction, and Location in Languages: In Honor of Zygmunt Frazyngier*, 259-286. New York/Amsterdam: John Benjamins,.

Slobin, Dan I. (1996) From ‘thought and language’ to ‘thinking for speaking.’ In John J. Gumperz and Stephen C. Levinson (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity*, 70-96. Cambridge: Cambridge University Press.

Slobin, Dan I. (1997) Mind, code, and text. In Joan Bybee and John Haiman, (eds.), *Essays on Language Function and Language Type*, 437-467. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Slobin, Dan I. (2004) The many ways to search for a frog. In Sven Strömqvist and Ludo Verhoven, (eds.), *Relating Events in Narrative*, *Vol. 2: Typological and Contextual Perspectives*, 219-257. New Jersey/London: Laurence Erlbaum Associates.

Slobin, Dan I., and Nini Hoiting (1994) Reference to movement in spoken and signed languages: Typological considerations. *BLS* 20: 487-505.

高橋清子 (2017)「タイ語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』129-158. 東京：くろしお出版.

Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 3: Grammatical Categories*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, Leonard (1991) Path to realization. *BLS* 17: 480-519.

Talmy, Leonard (2000) Toward a Cognitive Semantics, Vol. 2. Cambridge: MIT Press.

Talmy, Leonard (2005) A windowing to conceptual structure and language: lexicalization and typology. Annual Review of Cognitive Linguistics 3-1: 325-347.

千田俊太郎 (2017)「ドム語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』159-187. 東京：くろしお出版.

Wälchili, Bernhard (2001) A typology of displacement (with special reference to Latvian). STUF 54-3: 298-323.

吉成祐子 (2017)「イタリア語の移動表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』189-211. 東京：くろしお出版.

How Japanese Encodes Caused-Motion Events: Variations in the Coding Patterns According to the Means of Causation

Hiroaki KOGA
h_koga@z3.keio.jp

Keywords: caused-motion event, head coding of path, head-external coding of path, figure-subject construction, figure-object construction

Abstract

Following up on Koga (to appear), which focused on the linguistic encoding of caused-motion events in Japanese, involving KICKING as a means of causation, this paper attempts to investigate how Japanese encodes caused-motion events more comprehensively, involving not only KICKING but PUTTING, CARRYING, and CALLING as means of causation. Drawing on the experimental data, I elucidate that i) the frequency of semantic components, particularly deixis, ii) the semantic component coded in the head position (i.e., main verb), and iii) the constructions used to depict motion events, vary significantly according to the means of causation, and probe into language-specific as well as universal factors that bring about such variations.

（こが・ひろあき　慶應義塾大学）